

「中国古典楽器「古箏」の紹介と演奏」

伊藤志津子

・古箏演奏

演奏者： 伊藤志津子、 森本百合、 内田律子

演奏曲目：

1. 瀏陽河 (森本百合、伊藤志津子)

湖南地方の民歌を古箏曲として改編したもの。リュウヤン河を讃える歌。

2. 山丹丹開花紅艷艷 (内田律子)

陝北地方の民歌。中国の西北部、寒く乾燥して、気候の厳しい地方の山々に咲く紅い花を愛でる。

3. 雪山春暁 (森本百合)

チベット族の曲。チベット高原、高山、季節の移り変わりとそこに暮らす人々の様子を描いた曲。

4. 紡織忙 (伊藤志津子)

糸紡ぎ、はた織り、工場で忙しく働く娘たちの様子を表現した広東音楽の代表曲。

5. 漁舟唱晚 (伊藤志津子)

漁を終えて帰ってくる舟。たそがれの漁港。古琴曲。

以 上

参考資料

中国古典楽器「古箏」について

雲南懇話会の「雲南」に私の心臓がトクんと反応して、今日の演奏につながりました。

雲南省の都、昆明に何があるかと問われれば私は何軒もの民族楽器屋さんと答えます。箏だけで言うならばお茶の店、翡翠の店には足元にも及ばないのですが、あれほど軒を連ねて楽器店が立つのは他の街でまだ出会っていないからです。

古箏曲の代表的なもので、イ族舞曲、ヤオ族舞曲、トン族舞曲があり、他にもそれぞれの民族舞曲や歌の曲があります。雲南省の少数民族数は56もあり、中国で最も少数民族の多い省ですから、その省都である昆明の民族楽器店の必要性も高いのかと思われます。

雲南と古箏が私の中で学術的意味合いで繋がることは何も思いつきません。しかし歌と踊りと笛太鼓という暮らしの文化は雲南にも充滿しているのです。それは昆明の楽器店から私にも容易に想像でき、雲南と古箏はぴったりとつながります。

- * 中国の楽器「古箏」と言いますと、古箏という言葉になじみがなくて、ほとんどの方は二胡を思いつくようです。二胡は日本では人気の中国楽器で、二胡振興会があり検定試験も定期的に行われています。ですが、中国で人気の楽器は「古箏」だそうです。日本の子供たちがピアノを習うのと同じように3歳くらいから古箏を習い始める子供が多く、古箏はお稽古のための需要も高いようです。「お嬢様のお稽古ごと」の時代があったそうで、だからかどうかわからないですが、女の子の楽器というイメージが現代もあります。コンクールに参加するのもほとんどが女性で、男性は一握りです。しかし、その一握りの男性奏者たちの力強さとスピード感のある演奏は女性にないものがあり、興味深いです。
- * 日本の琴とのサイズ比較。
琴（13弦）——山田流 183cm×30cm。 生田流 170cm×28cm
古箏（21弦）——163cm×34cm。 （古琴 7弦——120cm×20cm）
- * 古箏は2000年以上前から弾かれている楽器ですが、古箏と呼ばれるようになったのは20世紀になってからのことで、単に「箏」と呼ばれていました。「秦箏」という名もあり、その記録から秦の時代にすでに使われていた楽器と言われています。姿形は日本の琴とほとんど同じですが、弦の数が違います。古箏の21弦は、それが現代もっとも普及しているという意味であって楽器としては16弦や25弦もあります。弦数は時代によって異なります。唐の時代に使われていた13弦（それが日本に伝わり、日本の琴となる）。清の時代の16弦。現代の21弦です。21弦になったことで、演奏できる曲の範囲がとてまもなく広がりました。
- * 弦の素材は絹でしたが、銅になったこともありました。現在は絹にスチールを巻き付けたものが使われています。
- * 演奏はツメを付けます。基本は右手の4指（小指以外）ですが、曲目によっては3指のみとなります。曲目に応じて左の指にもつけます。（本日の演奏では、リュウヤン河、雪山春暁。）

つけヅメは指の腹側にテープでくるくる巻きつけます。まれに自分の爪に重ねて巻きつけている演奏者もいます。素材は象牙、べっ甲、プラスチック等です。

* 日本の琴との違い、目立つ違いを3点あげます。

1. 椅子を使うこと。

ヒザの痛みにやさしい腰かけスタイルです。

2. 「お免状」を頂くような家元制度がないこと。

お月謝の工面がつけばいつでも、誰でも簡単に始められます。

3. 日本で言うような「流派」がないこと。

こだわらないで、どの流派に手を出しても良いのです。

* 流派についてもう少し書きます。

曲の解説では何々派、何々流との表現をします。あの先生は何々派…とも言います。代表的なものに浙江派、河南派、山東派、潮州派などがあり、それぞれを浙江流、河南流と「流」を付けて呼ぶこともあります。

お気づきのようにこれは地域名に流や派がついたものです。その地方で弾かれてきた演奏様式と言う意味です。

浙江派は軽やかにスピードのある曲が多いです。

河南派（北の流派とも呼ばれる）は右手の2指を弦につけたままで弾くのが特徴です。重い感じになります。

山東地方の曲は渋いというかお腹に響くような音です。

日本の家元制度的な「流派」は無くても、何派の先生ということはありません。私の先生、蘇宇虹氏は北京中央音楽大学の出身で、浙江派を継承されている先生です。

近代の主流は浙江派です。そしてその浙江派を基礎にして現代風の弾き方がまた新たに生まれています。弾き方にスピードを求めるのも現代の特徴です。「早いばかりが良いのではない」と私の先生はよく言いますが、コンクールなどで若い人が弾くのを見ているとスピードと派手な弾き方におどろかされます。弦だけではなく箏の木の部分を太鼓のように打ったりもします。演奏中に爪がすっ飛んでしまう人もいました。審査員をしていた蘇宇虹氏は「演奏中に爪を飛ばしてしまうなんてあってはいけないこと」と渋い顔をしていました。

27年間東京に住まい、古筝演奏家として活躍された蘇宇虹氏は先月11月末に帰国されました。私の今の先生は王莉氏です。王莉氏は蘇宇虹氏が北京中央音楽大学で教わった4人の恩師のうちのお一人で、河南派の長老です。

本格的に河南派を教えることのできる先生は中国でもほとんどいなくなってしまうということですから、私は日本にいながらにして貴重な先生に巡り会えたのです。この機会をしっかりとつかんで、さらに練習に励みたいと思っております。



雲南省全図

2011年11月の雲南 Field Work
の写真記録から。(前田栄三 編)

魏山、南紹国発祥の地

魏山古城

南紹古楽器演奏団



魏山古城の城楼



南紹古楽器合奏団の演奏風景